

ISSN 1344—8366

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 22 号, 2019 年, 抜刷 (pp.119-132)

<調査研究速報>

ペルー北部インガタンボ遺跡（第五次）と
カニャリアコ遺跡の発掘調査

山本睦（山形大学）、マリーナ・ラミーレス

Excavations at Ingatambo and Cañariaco

Atsushi Yamamoto (Yamagata University), Marina Ramírez

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』22, 2019, pp.119-132

<調査研究速報>

ペルー北部インガタンボ遺跡（第五次）と カニャリアコ遺跡の発掘調査

山本睦（山形大学人文社会科学部）
マリーナ・ラミーレス

1. はじめに

2018年5月から7月にかけて、ペルー共和国北部を流れるワンカバンバ川の右岸にある、インガタンボ遺跡とカニャリアコ遺跡で発掘調査を実施した^{〔註1〕}（写真1, 2; 図1, 2）。両者とも、行政的にはカハマルカ州ハエン郡ポマワカ地区に位置する遺跡である。筆者らは、ワンカバンバ川流域において、2005年から継続的に調査をおこなってきた。そして、遺跡分布調査（2005年）を皮切りに、流域で最大規模の神殿遺跡インガタンボを中心に発掘調査（2006年、2007年、2011年、2015年）を実施してきた^{〔註2〕}。これらの調査は一貫して、形成期（表1）におけるワンカバンバ川流域の社会動態の解明を主目的とするものである。

本稿ではまず、筆者らによるこれまでの調査成果をふまえたうえで、現状の課題を示し、2018年に実施した発掘調査の意義を明らかにする。そして、発掘調査の成果を報告するとともに、ワンカバンバ川流域における形成期の社会展開、とくに流域内および流域外の神殿間の関係性についての新たな知見を提示する。



写真1 インガタンボ遺跡遠景



写真2 カニャリアコ遺跡遠景

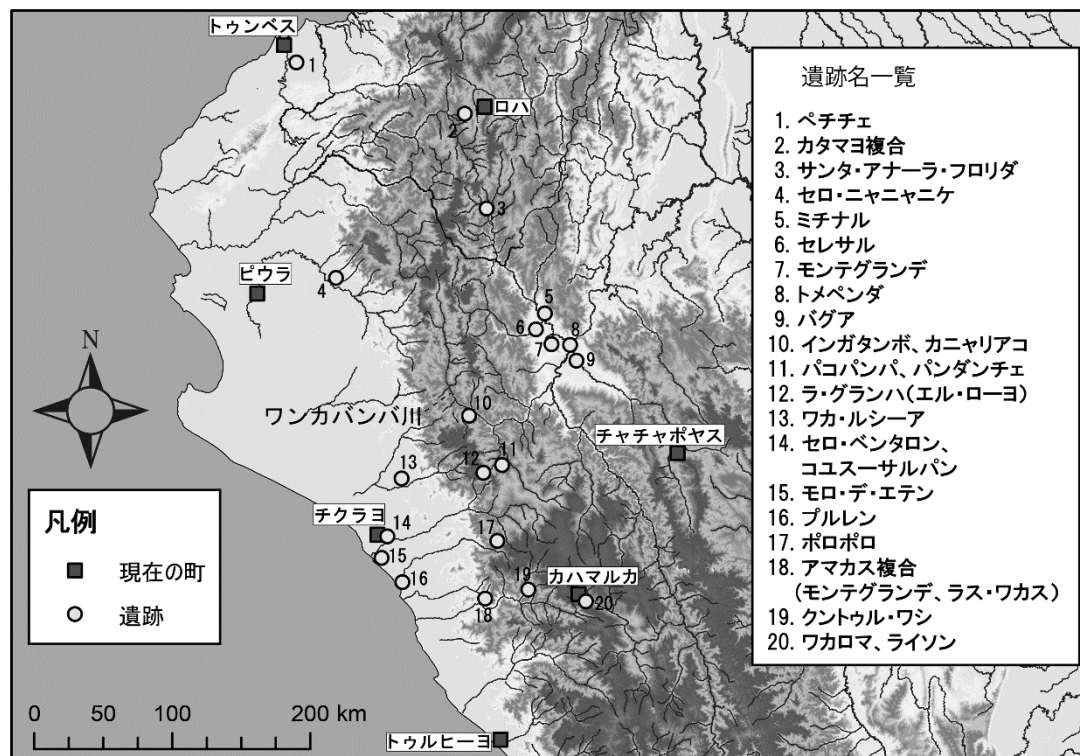


図1 本論で言及する遺跡と形成期の諸遺跡

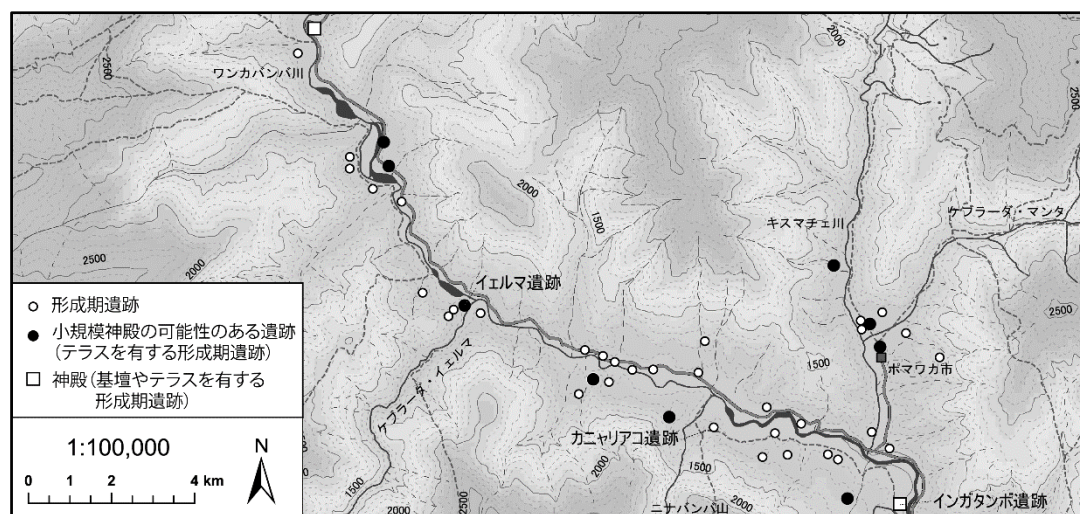


図2 ワンカバンバ川流域の諸遺跡

2. これまでの研究と本調査の位置づけ

2-1. インガタンボ遺跡の調査と成果

これまでに4シーズンの発掘調査をおこなったインガタンボ遺跡では、形成期からインカ期にわたる計5時期の建設活動を確認している〔山本 2012; 山本・ラミーレス 2015〕。形成期に該当するのは、そのうちのワンカバンバ期（紀元前2500-1200年）、ポマワカ期（紀元前1200-800年）、インガタンボ期（紀元前800-550年）の3時期である（図3）。

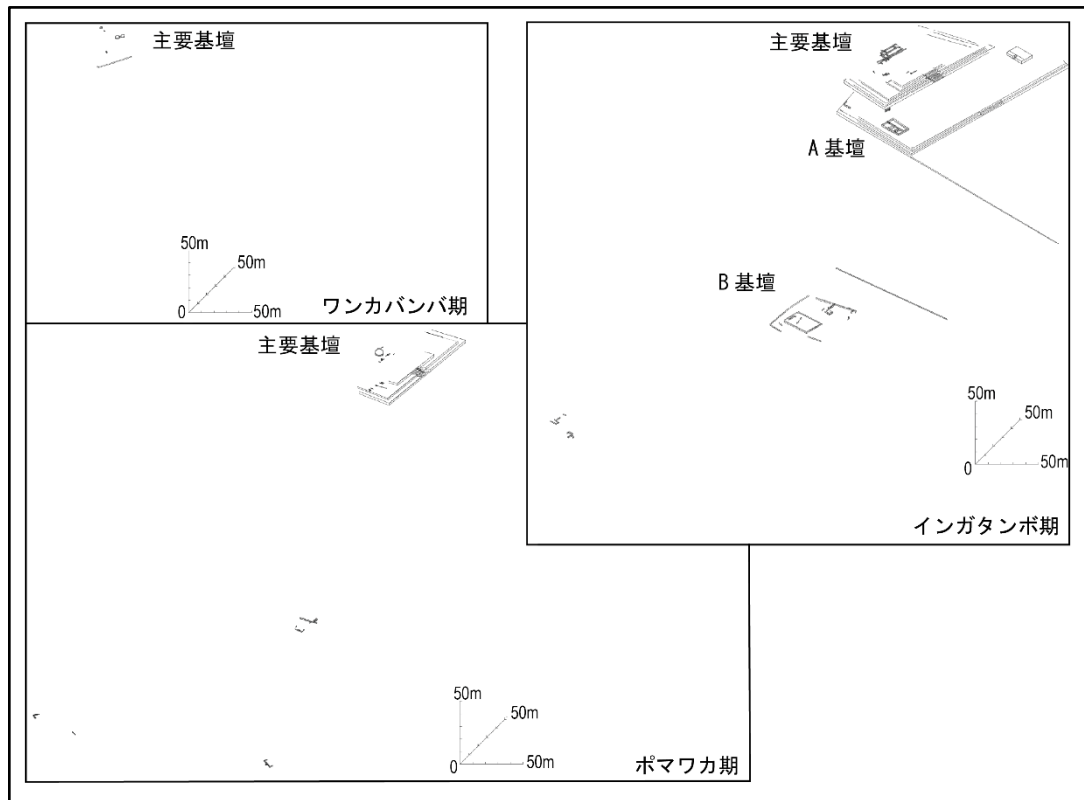


図3 インガタンボ遺跡の建築過程（形成期）

インガタンボでは、ワンカバンバ期に自然の丘陵を利用して、主要基壇部で建設活動が開始される。この時期の建造物は、いずれも地表面より4m以上掘り下げたところで確認されている。なかでも最も古い建造物の床面は、表土下5～6mのところにある。ポマワカ期以降のより新しい時期の建造物が上層に存在していることもあって、建造物を部分的にしか検出できておらず、全体プランは不明である。ワンカバンバ期の層まで掘り下げた2006年と2007年の発掘においても、土器が確認されていないため、当該時期は先土器期と考えられる。

ポマワカ期には、周期的な増改築である「神殿更新」が繰り返しおこなわれることで、主要基壇の規模が増していくと同時に、遺跡内の他の部分でも小基壇の建設活動が生じる。また、この時期から主要基壇の頂上部に精巧に仕上げられた部屋状構造物が築かれたことが明らかになっている。しかし、続くインガタンボ期の建造物

の存在もあって、確認できている部屋状構造物は頂上部東側のみで、その詳細は不明である。土器が利用されはじめるとともに、海水生種の貝や石皿といった周辺地域との地域間交流を示す遺物が確認されるようになるのも、この時期の特徴といえる〔山本 2012; 山本・伊藤 2013; Yamamoto 2010, 2011, 2013〕。

形成期のなかで最も状況が明らかになっているのが、インガタンボ期である。この時期には、最大規模の更新がおこなわれ、神殿の規模が巨大化し、建造物の配置も複雑化する。主要基壇上には部屋状構造物群が築かれ、そのアクセスは制限されていたようである。土器や貝に加えて、ペルー南部起源の黒曜石も確認されるなど、周辺地域や遠隔地との地域間交流を示す物的証拠が増加する〔山本 2012; 山本・伊藤 2013; Yamamoto 2010, 2011, 2013〕。

その後、インガタンボは神殿としての役割を失い、放棄されたと考えられる。しかし、ラス・フンタス期（紀元後 1300-1400 年）とタンボ期（紀元後 1400-1500 年）になると、形成期に築かれた基壇を部分的に利用しながら、再び建設活動がみられるようになる。

以上のように、インガタンボ遺跡では神殿の建設過程が明らかにされつつある。しかし、ワンカバンバ期とボマワカ期については、データが極めて乏しいのが現状である。建造物の詳細や全体プランだけでなく、年代に関するデータも不十分であるため、編年の確立には、建築と対応した考古資料の充実と、それらの放射性炭素年代測定の実施が不可欠である。さらに、近年、ワンカバンバ川の東側に位置するハエン地方のモンテグランデ遺跡では、紀元前 2500 年をさかのぼる先土器の神殿の事例が報告されている〔Olivera 2013, 2014〕。こうした事例との比較資料を手に入れるためにも、インガタンボ遺跡の調査は重要であるといえる。

2-2. ワンカバンバ川流域の調査と成果

分布調査によってボマワカ期に属する遺跡が 62 確認されており、地域間交流の活発化とともに、ワンカバンバ川流域が集中的に利用されるようになる〔山本 2012, 2014; Yamamoto 2007〕。遺跡のなかにはインガタンボ遺跡を筆頭に神殿と考えられるものもあり、それらは隣接地域との交流ルートに近接している。インガタンボ期になるとこの状況は大きく変化し、3 遺跡でのみ活動が確認されるようになる。インガタンボが流域内の社会統合の核となるとともに、流域内の遺跡が激減したと考えられている。

2018 年の発掘対象となった 2 つの遺跡は、分布調査時に形成期の神殿と考えられたものである。カニャリアコ遺跡を神殿と推測した理由は、明瞭なテラス状構造および、その頂上部にあると考えられる小規模な基壇という建築的特徴と、地表面で観察された精製土器にある。しかし、2015 年の調査では、同様の基準で神殿と位置づけていたイェルマ遺跡における形成期の活動が、極めて小規模であったことが明らかになっている。そのため、カニャリアコ遺跡の発掘を通じて、テラスを有する遺跡の特性について改めて考察し、それをふまえて流域全体の社会動態を再考することが、喫緊の課題であるといえる。流域内には、インガタンボと同様の建築特徴をもつ神殿と考えられる遺跡があるが、それ以外のテラスを有する遺跡が神殿であったのか否か、流域内に複数の小規模な神殿が併存したのか否かを検証するためである。このことは最終的に、その建設や維持などといった神殿をめぐる諸活動と神殿を核とした地域内・地域間交流を一つの手がかりとして、ペルー北部というマクロな視野のなかで、形成期社会の展開を考察するうえで、重要であると考えられる。

以上の研究や課題をもとに計画されたのが、2018 年の発掘調査であった。以下、その概要を遺跡ごとに明記する。

3. インガタンボ遺跡の発掘とその成果

インガタンボ遺跡は、海拔 1,066m に位置する神殿遺跡である。先述の通り、過去 4 シーズンにわたって発掘調査を実施してきたものの、とくにワンカバンバ期とポマワカ期に関するデータが不足しており、編年も確立できていない。そのため本調査では、遺跡のなかで最も堆積が厚く、ワンカバンバ期からタンボ期までの建設活動が存在する A 基壇を中心に、発掘をおこなった^(註3)。より詳細には、A 基壇頂上部にある部屋状構造物群の西側と、A 基壇中央部の東側の 2 地点に発掘区域を設定した(写真 3)。発掘の基本ユニットは、これまでの調査と同様に 2m×2m である。



写真 3 A 基壇と発掘区

3-1. A 基壇頂上部の部屋状構造物群西側

2006 年の発掘では、はじめに A 基壇の中心で十字をきるようにトレンチを設け、A 基壇全体の遺構と堆積状況を確認した。そのうえで、2007 年にかけて、発掘区域を拡張し、A 基壇頂上部に部屋状構造物群が存在することを明らかにした。これらの部屋状構造物群は、基本的にインガタンボ期に属するものであるが、頂上部東側の一部で、部屋状構造物の床面を掘り下げたところ、ポマワカ期の部屋状構造物を検出した〔山本 2012; Yamamoto 2010〕。そこで本調査では、頂上部西側にある部屋状構造物群の床を掘り下げることを計画した(写真 4)。その理由は、基壇頂上部におけるポマワカ期の状況を明らかにするとともに、建築と対応するコンテキストの確かな資料の分析を通じて、編年を精緻化することであった。

発掘に際しては、基壇頂上部西側に東西 10m×南北 10m の発掘区を設けて、すでに存在を確認していたインガタンボ期の部屋状構造物群を再発掘した。そして、部屋状構造物の壁やその上塗りの状態を徹底的に確認したうえで、床面を掘り下げたとしても建造物に影響が少ないと考えられる地点を数カ所選び、発掘をおこなった。

発掘の結果、インガタンボ期の部屋状構造物群の下に、ポマワカ期の部屋状構造物の一部を検出した。これま



写真4 A基壇頂上部の発掘

で調査によって、ポマワカ期には、4つのサブフェイズが存在したことが明らかになっている。今回確認された部屋状構造物は、少なくともそのうちの後半2つのサブフェイズに対応するものと考えられる。これによって、A基壇の頂上部には、ポマワカ期からすでに、複数の部屋状構造物が築かれていたことが明らかになった。以前の発掘結果から想定されていたものよりも、全体として複雑な配置が存在したことが推測される。また、ポマワカ期の遺構を検出することで、炭化物などポマワカ期の良好なコンテキストの資料を獲得することができた。

3-2. A基壇中央部東側

従来の調査では、トレンチが主たる発掘手法であったこともあり、A基壇上部の構造については不明な点が多い。地表面で視認できるのは、基壇上を取り囲むように存在するラス・フントス期の石壁だけである。また、発掘を通じてこれまでに明らかになっていた基壇上の建造物は、既述の頂上部にある部屋状構造物群と、基壇中央部の西側に存在するタンボ期の炉やそれともなう壁に加えて、トレンチから検出された形成期に属する数本の石壁のみであった〔山本 2012; Yamamoto 2010〕。つまり、A基壇中央部には、基本的に広場のような開放空間がひろがっていたと考えられていたのである。ただし、基壇中央部の堆積が非常に厚く、上層から下層に向かってインガタンボ期からワンカバンバ期までの多数の床面が存在することは、すでに確認されていた。そのため、A基壇中央部は、インガタンボにおけるすべての時期の建造物が存在し、かつ形成期の細やかな時期的変化をおえることから、編年構築に際して最適な発掘対象と考えられた。また、本調査の目的が編年の構築であり、上に積み重なる建造物の隙間をぬって、基壇の最下層まで掘り下げる必要があったため、A基壇上部をなるべく面的に発掘することを計画した。そこで、開放空間と考えられた基壇中央部東側を選定し、東西14m×南北14mの発掘区を設定した。

その結果、最下層までにたどり着くことができたのは限られた部分ではあるものの、ワンカバンバ期からタンボ期までのすべての時期の建造物を確認することができた（写真5）。以下、発掘で検出した順にその概要を記す。



写真5 A基壇中央部東側の発掘

表土をはぐと、タンボ期とラス・フントス期の遺構を検出した。ラス・フントス期に属する建造物は、地表面で視認できる、発掘区を北西—南東方向に走るように存在する1本の壁だけである。興味深いことに、タンボ期の建造物は、このラス・フントス期の壁を壊すか、あるいはラス・フントス期の層を掘り下げて築かれている。タンボ期の建造物として検出されたのは、主として石壁と炉である。それらは2006年の調査においても、基壇

上部西側部分で確認されており、基壇上部がタンボ期になって広く活用されたことがうかがえる。ただし、本調査では、インガタンボ期やポマワカ期の層をも掘り下げて築かれた、直径約0.6m、深さ約2.25mの円形構造物も検出された（写真6）。円形構造物の内部は、灰と石で埋められており、その最下部からはウミギクガイ（*Spondylus* sp.）が一点出土した。出土状況をふまえると、形成期の基壇を再利用する際に、奉納儀礼がおこなわれたことが推測される。

インガタンボ期については、低層基壇と部屋状構造物の一部と考えられる石壁を検出した。低層基壇の土留め壁は、面を北側（基壇への主要階段の方向）に向けて、南北に並んで築かれている。このことから、インガタンボ期には、主要階段をのぼって基壇上部に到達してから基壇頂上部の部屋状構造物群に達するまでのスペースにおいて、低層基壇が少しずつ高さを増しながら連なっていたことが、推測される。また、タンボ期の建造物が建設される際に破壊されており、その全容は不明であるものの、インガタンボ遺跡を通じて最初の事例となる水路も検出された。さらに、本調査においても、周辺地域との交流を示すような土器が確認されている（写真7）。これまでの調査・研究によって、インガタンボはペルー北部における地域間交流の重要地であったことを指摘してきた〔山本 2012; 山本・伊藤 2013; Yamamoto 2010, 2011, 2013〕。今回新たに獲得した基壇上の低層基壇や水路、および建築配置に関するデータは、従来の解釈を補強し、インガタンボとパコバンパ^{（註4）}など北部山地の形成期神殿との関係を強く示唆するものといえる。



写真6 タンボ期の円形構造物



写真7 インガタンボ期の土器

ポマワカ期に関しても、これまでの調査ではみつかっていない新たなデータが確認された。最も興味深い事例は、半地下式パティオとその角から延びる水路である。この半地下式パティオと水路は、ポマワカ期の最後のサブフェイズに対応するものである。また、インガタンボ期のものよりも、やや小さめの低層基壇も検出されており、ポマワカ期の最初のサブフェイズから、改築を伴いながら利用されてきたものと考えられる。これらの低層基壇や半地下式パティオおよび水路は、パコバンパにおけるパコバンパⅠ期の建造物との類似性が高い〔関 2010; Seki 2014〕。これまでの調査・研究では、ワンカバンパ川以南の形成期神殿との関係が強化されるのは、インガタンボ期からだとして想定していたが〔山本 2012; 山本・伊藤 2013; Yamamoto 2013〕、2018年の調査データは、ポマワカ期からその萌芽がみられる可能性を示唆している。今後の検証は必要であるが、周辺地域、とくに最北部海岸や北部熱帯低地の形成期遺跡と比較した際に浮かび上がってくる、インガタンボの独自性には、こうした背景が存在したことが推測される。

以上の建造物を残しながら掘り進める必要があったため、最下部に位置するワンカバンパ期の層に到達できた範囲は、想定よりも狭く、発掘区のなかでも東端の区画だけであった。しかし、この区画では、上塗りが施さ

れた円形構造物の一部を確認することができた（写真8）。ワシカバンバ期における円形構造物の事例は、2006年の発掘でその一部が検出されているものはあるが、その全体像は未だ明らかになっていない。限られた情報ではあるものの、今回検出した円形構造物は、層位的にも2006年のものと同時期であると考えられる。また、インガタンボの円形構造



写真8 ワシカバンバ期の円形構造物

物は、近年調査の進展が著しい北部熱帯低地のハエン地方のモンテグランデ遺跡で報告された建造物とは、建築技法や規模、形態の面で明確な差異がある [Olivera 2013, 2014]。ハエン地方から国境を越えたエクアドル南部のサンタ・アナ・ラ・フロリダ遺跡には、円形構造物の事例が多数確認されるものの [Valdez 2007, 2008, 2013]、それらとの関係も不明である。

4. カニャリアコ遺跡の発掘とその成果

カニャリアコ遺跡は、海拔 1,165m に位置する [山本 2012, 2014; Yamamoto 2007]。約 28m×22m の頂上部をもつマウンドから北東側にテラス状の構造物がのびているため、それらを横切るように東西 20m×南北 2m のトレンチを設けて、発掘作業に従事した（写真 9, 10）。発掘の基本ユニットは、インガタンボでの調査と同様に 2m×2m である。また、調査の目的は、遺跡の建設時期を解明することである。

発掘の結果、頂上部の堆積は非常にうすく、地表面から 20cm 程度掘り下げただけで、地山に到達することが明らかになった。テラスおよび斜面部の、堆積が最も厚い部分でもその深さは地表面から 70cm 程度であった。頂上部からテラス、斜面部にかけて、土留め壁と思われる石列やそれと関連する埋葬が検出されたが、この埋葬に共伴する副葬品などは確認されていない。出土する土器は、基本的にインガタンボ遺跡のラス・フンタス期とタンボ期のものが中心であった（写真 11）。しかし、最下層部では、形成期と考えられる土器が若干ではあるが認められる（写真 12）。そのため、踏査時のデータも示唆するように、形成期からカニャリアコ遺跡が利用されていたとは考えられる。ただし、神殿であった可能性は極めて低いといえる。



写真9 カニヤリアコ遺跡と発掘区



写真10 カニヤリアコ遺跡のトレンチ



写真11 カニヤリアコ遺跡出土土器1



写真12 カニヤリアコ遺跡出土土器2

5. おわりに：総括と今後の課題

本調査によって、インガタンボ遺跡では、ワンカバンバ期からタンボ期までの建設過程に関するさらなるデータがえられた。とくに、ワンカバンバ期とポマワカ期に関しては、想定をうわまわるデータを獲得したため、採集した試料の年代測定をふまえて、インガタンボ遺跡の編年を精緻化する基礎を築くことができたと考えられる。

また、カニャリアコ遺跡については、分布調査で想定されたような形成期の神殿であった可能性は否定されたものの、少なくとも形成期からの活動が存在したことが明らかとなった。

これらのデータを総合すると、ワンカバンバ流域における形成期の社会動態について、以下のような新たな見解と課題がえられた。

2018 年以前の調査から明らかになっていたように、ワンカバンバ期において、先土器期からインガタンボで小規模ではあるものの、神殿建設がはじまった。しかし、本調査で検出された円形構造物は、他に類例をみないインガタンボに独自の要素であると考えられる。ほぼ同時期のものと比定されながらも、周辺地域、とくにハエン地方のモンテグランデ遺跡の建造物との間には、建築技法や規模、形態などにおいて明確な差異が認められる。そのため、両地域の社会がそれぞれ独自の展開をみせたことが示唆される。これは、これまでの解釈〔山本 2012〕を補強するデータといえる。ただし、繰り返し述べてきたように、ワンカバンバ期の編年については、放射性炭素年代測定データが不十分であり、この問題をクリアしたうえで、再度、両地域の関係を検証する必要がある。北部海岸には、ペルー北部で最大かつ最古級の先土器期の神殿遺跡であるベントロンも存在する〔Alva 2013〕。ペルー北部における形成期早期の社会展開を理解するためにも、調査の進展が不可欠である。

ポマワカ期については、建造物の規模や複雑性が流域内で突出していることから、インガタンボが流域内において社会的統合の核となるような神殿であったと考えられてきた〔山本 2012〕。その一方で、流域内には複数の神殿が併存したことが推測されてきたが〔山本 2014〕、本調査結果をふまえると、同時に存在した可能性のある神殿の数は想定以上に少なかったことが示唆される。ただし、分布調査のデータが示すように、非神殿と考えられる遺跡数自体はこの時期から増加する〔山本 2014〕。そのため、今後もインガタンボ以外の神殿の発掘調査をおこないつつ、分布調査のデータを再考していく必要があるだろう。また、本調査成果のなかで特筆すべきことのひとつとしてあげられるのが、ポマワカ期の後半における神殿建築の変化である。インガタンボでみられた建築構造や配置の変化からは、ワンカバンバ川以南に位置する大規模神殿であるパコパンパとの共通性が認められる。これらのことから、従来の想定よりも早く、少なくともポマワカ期の後半以降に、インガタンボとワンカバンバ川以南の形成期神殿との交流が活発化し、建設活動の増大にともなってワンカバンバ川流域の労働力がインガタンボに収斂しはじめるようになったと推測される。

インガタンボ期に関する本調査成果は、いずれも従来の解釈を補強するものであり、インガタンボとパコパンパなど北部山地の形成期神殿との密接な関係を示唆している。

こうした作業仮説を検証していくためには、今回の調査で実施したように、インガタンボ遺跡で面的な発掘調査を継続的にこなっていくことも必要であると考えられる。また、インガタンボ遺跡が広大なため、これまでの調査は A 基壇に集中しておこなってきたという背景がある。A 基壇に続く大規模基壇である、B 基壇の発掘は、これまでにほとんど実施していないため、その調査を通じて、インガタンボ遺跡の特性を明らかにしていくことが重要である。これらの調査を通じて、ワンカバンバ川流域の社会動態だけでなく、広くペルー北部の形成期の社会展開についても、考察をひろげていきたい。

【謝辞】

本調査は、JSPS 科学研究費若手研究 A（課題番号「17H04778」）の助成をうけて実施されたものである。また、調査に際しては、山形大学の松本剛氏、松本雄一氏に多大なご協力をいただいた。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げたい。

最後に、2018 年の調査では日程調整がうまくいかなかったことなどもあり、これまで以上に調査参加メンバーとポマワカ地区の人々に迷惑をかけてしまうと同時に、公私にわたる多大な支援をいただいた。心より感謝の意を表する。

註

- (註1) 本調査の主たるメンバーは、筆者らに加えて、デニス・ロレンソ、グスタボ・スマラン、カルロス・ヒル、アレックス・マルドナド、パブロ・サアベラである。
- (註2) 2015 年にはイエルマ遺跡の発掘も実施した。イエルマ遺跡は、イエルマ山の頂上部から裾野にかけてひろがる遺跡複合で、分布調査ではイエルマ 1~6 にわけて登録をおこなっている。発掘した箇所は、現代の集落が位置し、山の麓にある形成期の神殿と考えられていた区画である。分布調査の登録では、イエルマ 6 遺跡に相当する。
- (註3) 2015 年に実施した調査の確認作業として、E 基壇でも南北 2m×東西 4m の小規模な発掘を実施した。前回の調査で未完であったインガタンボ期の部屋状構造物の一部を検出し、図面を作成したのみで終了している。
- (註4) パコパンパの調査データ・解釈に関しては関 [2010] ならびに Seki [2014] を参照。

参考文献

Alva, Ignacio

- 2013 *Ventarrón y Collud: Origen y auge de la civilización en la costa norte del Perú*. Ministerio de Cultura del Perú / Proyecto especial Naylamp Lambayeque, Lima.

Olivera, Quirino

- 2013 Avance de las investigaciones arqueológicas en la alta Amazonía, nororiente de Perú. In *Arqueología Amazónica: Las Civilizaciones Ocultas del Bosque Tropical*, edited by F. Valdez, pp. 173–203, Actes & Mémoires de l'Institut Français d'Études Andines, tomo 35. Instituto Francés de Estudios Andinos, Lima.
- 2014 *Arqueología Alto Amazónica. El Origen de la Civilización en el Perú*. Apus Graph, Lima.

関雄二

- 2010 「形成期社会における権力の生成」『古代アンデス 神殿から始まる文明』大貫良夫、加藤奏建、関雄二編 pp.153-202、朝日新聞出版。

Seki, Yuji

- 2014 La diversidad del poder en la sociedad del Período Formativo: Una perspectiva desde la sierra norte. In *El Centro Ceremonial Andino -Nuevas Perspectivas para los Periodos Arcaico y Formativo*, edited by Y.Seki, Senri Ethnological Studies 89:175-200. National Museum of Ethnology, Japan, Suita.

山本睦

2012 『先史アンデス形成期の社会動態—ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から—』 総合研究大学院大学文化科学研究科博士論文。

2014 「先史アンデス形成期社会における人々の活動と戦略—ペルー北部ワンカバンバ川流域のセトルメント・パターンと景観—」 『年報人類学研究』 4 : 1-32。

山本睦、伊藤裕子

2013 「ペルー北部とエクアドル南部における形成期の地域間ルートと地域間交流 : GIS による加重コストルート分析を用いて」 『古代アメリカ』 16 : 1-29。

山本睦、マリーナ・ラミーレス

2015 「インガタンボ遺跡（第四次）およびイェルマ遺跡の発掘調査」 『古代アメリカ』 18 : 65-77。

Yamamoto, Atsushi

2007 El reconocimiento del valle de Huancabamba, Jaén, Cajamarca, Perú. *Arkeos* 2(2): 1-16.

2010 Ingatambo: Un sitio estratégico de contacto interregional en la zona norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 25-52.

2011 Contacto intercultural entre el sur de Ecuador y el norte del Perú. *Revista Nacional de Cultura* 15-16, Tomo II: 399-408.

2013 Las rutas interregionales en el periodo Formativo para el norte del Perú y el sur de Ecuador: Una perspectiva desde el sitio Ingatambo, valle de Huancabamba. *Arqueología y Sociedad* 25: 9-34.

Valdez, Francisco

2007 Mayo-Chinchi: The Half-Open Door. In *Ecuador: The Secret Art of Precolombian Ecuador*, edited by D. Klein, I. Cruz and L. Doyon, pp.320–349. 5 Continentes, Milan.

2008 Inter-zonal Relationships in Ecuador. In *Handbook of South American Archaeology*, edited by H. Silverman and W. Isbell, pp. 865–888. Springer, New York.

2013 Mayo Chinchi: Hacia un replanteamiento del origen de las sociedades complejas en la civilización andina. In *Arqueología Amazónica: Las Civilizaciones Ocultas del Bosque Tropical*, edited by F. Valdez, pp. 99–146. Actes & Mémoires de l'Institut Français d'Études Andines, 35. Instituto Francés de Estudios Andinos, Lima.

原稿受領日 2019年6月30日

原稿採択決定日 2019年8月26日